

## 70

# 飢饉は天災だけで起こるのか

●天保の大飢饉と甲州の百姓一揆

渡辺 尚志（一橋大学助教授）

## ウンカが食べつくした米

一七三二年（享保一七）は大飢饉の年でした。六月初め（旧暦）には梅雨空は一段落しましたが、涼しい日が続いてなかなか暑くなりませんでした。ウンカが発生しました。ウンカとは体長一センチ以下の小さな虫で、稲の汁液を吸って枯らす害虫です。このウンカが、しだいに四国、中国から近畿地方まで席捲していき、これらの地方では、稲が食い荒されて大飢饉となりました。

この飢饉で大きな被害を受けた大名は、九州・四国・中国・近畿で計四六藩におよび、これら諸藩の過去五年間の平均収穫高二三六万石に対して、一七三二年の収穫高は六二万八千石に過ぎず、平年の三割弱の収穫しかありませんでした。この年の餓死者の数は徳川家の正史である『徳川実記』によれば九六万九九〇〇人とされています。

## 江戸時代の飢饉

農業生産が不安定であった近世においては、不作・凶作が発生しやすく、大規模な飢饉が何回も起こりました。飢饉の原因としては、旱害・冷害・風水害・病虫害などの自然災害があげられます。とりわけ、冷害によって起こることが多く、東北地方が最も

多くの被害を被りました。また、近世最大の飢饉である天明の大飢饉は、一七八三年（天明三）に群馬・長野県境の浅間山が大噴火をおこして近辺の広大な地域に火山灰を降らせたために、農作物が枯死し、また、空气中に舞い上がった火山灰が日光を遮って気温を下げるために起こったものです。

しかし、近世の飢饉の原因を天災にのみ求めるわけにはいきません。飢饉は人災としての側面を兼ね備えていたのです。すなわち、近世には全国が幕府領・大名領・旗本領・寺社領などに分割され、各大名は程度の差こそあれ、それぞれの藩領域内のことをのみを考えて政治を行っていましたから、飢饉の際にも自領内で餓死者を出さないことを第一義的に考えて、他領の窮状にはわりと冷淡でした。

飢饉になると、どの大名も穀留<sup>こくどめ</sup>といって他領への米穀移出を禁じ、自領と他領の境には番所を設置して、米の移出に目を光らせました。そのために、食料不足の地域に対して、余裕のある地域から緊急に食料を輸送するといったことが行われにくく、それが凶作の被害をいっそう深刻なものにしたのです。

## 甲州天保一揆（郡内騒動）

飢饉が天災のみによって起こるのではない以上、その克服のための闘いの方向も、農業技術の改良とともに、飢饉を生み出す社会的条件の除去にも向けられます。その代表的なものが百姓一揆です。

ここでは、一八三六年（天保七）の天保の大飢饉に際して起こった甲斐国（山梨県）の老百姓一揆を事例としてとりあげます。

一八三六年八月一七日、甲斐国都留郡（郡内地方と通称されていた

①近世の民衆は飢饉の惨禍に受動的に甘んじていたわけではなく、品種改良によって冷害に強い稲の品種を作り出していった。また、鰐油を田の水面に撒いて、その上に稲についたウンカを払い落とし、ウンカを窒息させて殺すことも行われた。

ました)の農民たちは、天保の大飢饉による米価高騰にたまりかねて、米穀安売りを要求して蜂起しました。甲州天保一揆(郡内騒動)の始まりです。郡内地方は甲斐国東部の山間地帯で、米穀生産量が少なかったため、凶作の影響をもろに受けたのでした。

しかし、ここで注意してほしいのは、郡内地方は閉鎖的・自給自足的な遅れた山村地帯ではなかったということです。郡内の百姓たちは、田地の不足を補うために絹織物業を発達させ、郡内絹は当地の特産品となっていました。また、彼らは郡内を通る甲州道中の交通運輸労働や、林業などからも現金収入を得ていました。こうして得られた金で、国中地方(甲斐国中・西部)の村々や隣国から飯米を購入していました。すなわち、近世中後期になると、全国的な商品・貨幣経済の発展の波は山間地帯をも巻き込んでいたのです。

こうした状況下で起こった天保の大飢饉により、米価は高騰し、それに加えて米の輸送量が減ったために、交通運輸労働による現金収入の機会が減少しました。さらに飢饉ともなれば食糧が不足することが最先で、着るものにまで手が回らないというわけで、絹織物の価格が下落したこともあって、郡内の農民たちの生活は困窮しました。そこで、彼らはいちいち立ち上り、郡内に米を供給していた国中地方東部村々の米穀商・豪農のうち、買い占め、売り惜しみをしていた者たちを打ちこわしたのです。

以上みたように、飢饉と百姓一揆とは強い関連性をもっていたのですが、その関連性の中身は、生産力が低く自給的な生活をしていた地方の農民たちが餓死の瀬戸際で蜂起したというのではなく、商品・貨幣経済の発展によって、特産物を販売して食料を購入するようになっていた農民たちが米穀の安売りを求めて立ち上ったというものでした。近世中後期の百姓一揆の多くは、甲州天保一揆のよ

うに、商品・貨幣経済の一定の展開を前提として起こっているのです。

### 一揆の展開

では、甲州天保一揆のその後の展開をもう少し追ってみましょう。八月一七日に決起した郡内地方の一揆勢は、二二日には国中地方東部の打ちこわしを終えて郡内に引きあげます。しかし、一揆はこれで終わるのではなく、国中地方の貧農・無宿人に主力を移しつつ、甲府盆地全域に拡大します。そして、二三日には甲府の町に侵入して、町内下層民を一揆に巻き込みながら、豪商一三軒を打ちこわしました。

当時の甲斐国は一国ほとんどが幕府領でしたが、幕府の代官所役人や甲府城を固めた武士たちだけではとうてい一揆を鎮圧できず、信濃国(長野県)や駿河国(静岡県)の各藩に出兵を要請して、ようやく二五日に一揆を鎮めることができたのでした。二三日以降の一揆は甲府盆地を舞台に展開したのですが、同盆地は米作地帯であり、甲府は近隣の米穀流通の結節点であって、凶作とはいえ、それなりの米の備蓄がありました。しかし、ここでも商品・貨幣経済の発展の結果、農村では豪農・米商人らが土地と富を集積する一方で、土地を失った小作人・貧農層が大量に生みだされつつありました。また、甲府でも豪商・米商人の対極に、その日暮らしの膨大な都市下層民が存在していました。そして、小作人・貧農・都市下層民が、米の買占め、売り惜しみをした豪農・豪商・米商人を襲撃したのです。ここからも、飢饉が一面では人災であったことをみてとれます。

〔参考文献〕\*横山十四男『百姓一揆と義民伝承』(教育社、1977年)

\*荒川秀俊『飢饉』(教育社、1979年)